



# 2016年米予備選挙で何が起きているのか ― 二大政党の分析と展望

にしかわまさる  
西川 賢

(津田塾大学国際関係学科准教授)

を示したい。

日本でも大きく報道されているように、2016年のアメリカ大統領予備選挙は民主党・共和党ともに大変な混戦になっている。今回の予備選挙でいったい何が起きているのだらうか。波乱の幕開けとなった予備選挙について、両党の党内情勢の概観、選挙結果の分析、そして若干の展望

## 共和党内部の対立構図

予備選挙における共和党内の対立の構図は明確である。共和党内の一方の極には、議会共和党の指導部などを占

めるエスタブリッシュメントと呼ばれる保守本流がいる。エスタブリッシュメントは基本的に保守的ながらも、現実的で柔軟な姿勢を持ち、民主党との妥協も辞さない穏健な中道勢力である。

今回の選挙でいえば、マルコ・ルビオ氏、ジョン・ケーシック氏、ジェブ・ブッシュ氏、クリス・クリステイー氏などがエスタブリッシュメントに分類される候補者とされている。

そして、もう一方の極には、「キリスト教に基づく社会価値」や「アメリカの伝統」などの社会的価値に執着するキリスト教右翼、あるいは「小さな政府」の実現を追求する経済保守など、保守強硬派と呼ばれる勢力がいる。「キリスト教優先」を主張し、宗教右派からの支持を受けるテッド・クルーズ氏は保守強硬派に分類されている。そのいずれにも分類されない第三局として、今回の選挙で台風の目となっているドナルド・トランプ氏が存在する。

ニューヨーク・タイムズ紙の最近の調査によれば、トランプ氏は高卒以下の白人、農業・建設業・製造業など肉体労働に従事する人々、トレーラー・ハウスに居住する人々などに強く支持されていることが判明している。いわば、白人下位中流層と総称される人々である。これらの人々はアメリカ社会の現状に強い不満を持ち、自分たちは誰からも顧みられておらず、白人が少数集団と化すことへの怒り

や恐れを抱いている。つまり、彼らはマイノリティー人種集団（とくに黒人）、移民・外国人、そして共和党の指導部を牛耳るエスタブリッシュメントに強い不満と反感を持っている。

### 共和党予備選挙の結果と分析

これまでの共和党予備選挙の趨勢を振り返ってみたい。

初戦であるアイオワ州党員集会直前の世論調査では、トランプ氏が優勢を保ちつつも、保守強硬派のクルーズ氏や、エスタブリッシュメントの支持を集めるルビオ氏といった候補も一定の支持を有していた。キリスト教右翼が多く、保守的なアイオワ州の党員集会では強硬派のクルーズ氏が勝利したが、ルビオ氏も追い上げを見せ、3位に食い込んだ。

トランプ氏は地上戦の不足がたたったなどともいわれ、アイオワ州では2位に終っている。また、この時点でいまだ10人を超える候補者が残っていたため、その後情勢は不透明だった。

アイオワ州の党員集会ではルビオ氏は得票順位こそ3位だったが、代議員獲得数（7人）で見ればトランプ氏と互角である。リック・サントラム氏、ボビー・ジンダル氏、ティム・スコット氏、マット・サーモン氏など共和党の有力者が次々とルビオ支持を公言しはじめ、ここで一気にルビオ



西川 賢 (にしかわ・まさる) 津田塾大学学芸学部国際関係学科准教授。1975年9月兵庫県生まれ。日本比較政治学会理事、日本選挙学会理事。東京財団・現代アメリカ研究プロジェクトメンバー。専門は政治学、アメリカ政治研究。慶應義塾大学法学部政治学科卒業後(99年)、同大学院博士課程を修了(2007年)。博士(法学)。フルブライト・フェローとして渡米後、日本国際問題研究所研究員、九州大学客員准教授、一橋大学客員准教授などを経て、11年4月より現職。著書に、『ニューディール期民主党の変容—政党組織・集票構造・利益誘導』(慶應義塾大学出版会、08年)、『分極化するアメリカとその起源—共和党中央路線の盛衰』(千倉書房、15年)など。

氏に流れが傾くか  
に思われた。

だが、ルビオ氏は  
躍進できなかった。  
ニューハンブ  
シャー州の予備選  
挙直前の討論会で  
失態を演じたこと、  
またアイオワ州の  
党員集会後もジェ  
ブ・ブッシュ氏、  
クリス・クリス  
ティー氏、ジョン・  
ケーシック氏が撤  
退を拒み、エスタ  
ブリッシュメント  
がルビオ支持で結  
束できなかったこ  
とが痛手となった。  
他方、ランド・  
ポール氏、サント  
ラム氏、マイク・  
ハカビー氏など保

守強硬派の候補者がアイオワ後に相次いで撤退したため、  
キリスト教右翼やリバタリアンの票はクルーズ氏に流れた  
と考えられている。勢いに乗れなかったルビオ氏とは対照  
的に、クルーズ氏はその後も勢力を保つことに成功したの  
である。

続くニューハンブシャー州の予備選挙は、共和党員でな  
くとも投票可能なオープン・プライマリー方式だったため、  
無党派層にも支持のあるトランプ氏が勝利する。ここでル  
ビオ氏は伸び悩み、アイオワ州で8位と振るわなかった  
ケーシック氏が2位につけて「善戦」、ブッシュ氏も4位  
に食い込んできた。ルビオ氏は5位と全くの不振で、ニュー  
ハンブシャー以降は失速してしまう。

候補者を一本化できないエスタブリッシュメントを尻目  
に、続くサウスカロライナ州の予備選挙、ネバダ州の党員  
集会ではトランプ氏が比較的大差で勝利を収めた。トラン  
プ氏はこの三連勝で勢いに乗った感がある。

こうして、トランプ氏優位で突入した予備選挙序盤の山  
場、スーパーチューズデー(3月1日)で、トランプ氏は  
11州中7州で勝利を収めた。スーパーサタデー(3月5日)  
でもトランプ氏はルイジアナ州とケンタッキー州を制し、  
ここで共和党のフロント・ランナーとしての位置を占める  
ことに成功する。

ミニ・スーパーチューズデー(3月15日)ではルビオ氏



2016年3月14日、フロリダ州タンパで演説するトランプ氏＝AP

の地元フロリダ州でトランプ氏が圧勝し、ルビオ氏はついに撤退に追い込まれた。同日、トランプ氏はイリノイとノースカロライナ、そして暫定的ではあるがミズーリ州でも勝利を収めた。だが、フロリダと並び、共和党予備選挙の帰趨を左右するもう一つの州であるオハイオでケーシック氏が勝利したため、ルビオ氏は撤退したものの、クルーズ氏とケーシック氏は完全に息の根を止められたとまではいえない。

共和党の大統領候補指名を確実にするためには1237人の代議員を獲得する必要があるが、3月15日のミニ・スーパーチューズデー終了時点でトランプ氏は621人、クルーズ氏が396人を獲得し、138人の獲得にとどまっているケーシック氏、168人の獲得に終わったルビオ氏を大きく引き離している状況である。

### 民主党内部の対立構図

民主党内部におけるヒラリー・クリントン氏とバーニー・サンダース氏の対立は、「民主党におけるエスタブリッシュメントと社会主義者の対立」などと表現されることが多い。この捉え方は正確なのだろうか。両者の政策案を比較検討してみよう。

税制では、サンダース氏は富裕層への10%の追加課税、資本利得・不動産への課税を主張している。対するクリン

トン氏は500万<sup>ドル</sup>以上の所得層への4%の付加税など、より穏健な課税案を主張している。

学校教育では、サンダース氏はウォール・ストリートへの課税で財源を捻出し、公立大学を無償化すると主張している。これに対して、クリントン氏は2年間の短大のみ無償化を目指し、学生融資の利率引き下げ、学校補助金の175億<sup>ドル</sup>の拡充による学費の引き下げなど、より穏健で現実的な政策を提案している。

国民皆保険について、サンダース氏は政府により大きな権限を持たせ、政府が国民に例外なく保険を提供する案を打ち出している。これは「カナダ方式」「シングル・ペイヤー案」と呼ばれるもので、民主党の左派が長らく提唱し続けてきた案であり、現行の保険制度を強化拡充するアイデアといえよう。

対して、クリントン氏は現行の保険制度（オバマ・ケア）を維持するとともに、薬代に上限を設けて製薬会社を規制する穏健策を提示している。

両者を比較すると、税制や教育、保険制度など多くの領域でサンダース氏がより急進的な案を支持しており、クリントン氏が穏健な案を主張して対立していることが分かる。

両者の「社会主義者とエスタブリッシュメントの対立」というよりは、むしろ民主党に以前から存在した「急進的

な旧民主党左派と穏健で中道的なニュー・デモクラットの対立」と捉えるほうが正鵠を射ているのではないだろうか。

### 民主党予備選挙の結果と分析

ここまでの民主党予備選挙の趨勢はどうであったか。

初戦のアイオワ州は、ヒラリー・クリントン氏にとつては鬼門であった。1992年の大統領選挙で夫ビル・クリントン氏がアイオワ州の党員集会を制することができず、ヒラリー氏自身も2008年の民主党予備選挙で伏兵だったバラク・オバマ氏にアイオワで敗れ、勢いに乗れなかつた過去があるからである。

今回のアイオワ州党員集会で、クリントン氏は薄氷を踏むような勝利であったとはいえ、勝利を収めた。サンダース氏もほぼクリントン氏と同数の代議員を確保したが、クリントン氏がアイオワ州で首位を獲得し、懸念された初戦を制したことの意味は大きい。

続くニューハンプシャー州では首位をサンダース氏に奪われたものの、クリントン氏は9人の代議員を獲得した。ネバダ州の党員集会でも、クリントン氏は当初の不利を覆し、首位を獲得している。

共和党では予備選挙序盤でランプ氏が勢いを得た感がある。他方、民主党では予備選挙序盤の数州でクリントン氏がサンダース氏の挑戦を受けながらも失速せず、手堅く



2016年3月15日、フロリダ州パームビーチで演説するクリントン氏= AP

戦い抜いた印象が強い。

その後もクリントン氏は堅実な戦いぶりを見せた。サンダース氏は白人リベラル（特に青年層）に支持者が多いといわれるが、対するクリントン氏は黒人の支持者が多い。ゆえに、黒人有権者の多い南部ではクリントン氏が有利とされてきた。

実際、クリントン氏はジョン・ルイス下院議員や黒人議員連盟など有力な黒人勢力からの支持も得て、これまでのところ南部全州を制して勢いを保ち続けている。

また、民主党の代議員には連邦上院議員・下院議員、州知事などから構成される「スーパー代議員」(Super Delegates)と呼ばれる人々が存在する。これらの人々は特定の候補者を支持するべく拘束されている訳ではないが、通常は自らの選出州の予備選挙の結果に沿って投票する。これまでに、クリントン氏は465人の「スーパー代議員」からの支持を獲得することにも成功している。

他方、サンダース氏は黨員集会形式の州で優位にあり、アイオワ州・ネバダ州の黨員集会こそ僅差で落としたものの、他の黨員集会形式の州をすべて制している。

予備選挙序盤の山場であるスーパーチューズデーにおいて、クリントン氏は11州中7州で勝利し、437人の代議員を獲得し、サンダース氏(121人)を引き離した。

だが、サンダース氏に有利な黨員集会形式の多かった

スーパーサタデーでは、クリントン氏は56人の代議員を獲得したものの、サンダース氏が53人の代議員を獲得して粘りを見せ、クリントン氏がサンダース氏を一気に突き放すまでには至らなかった。また、事前の世論調査でクリントン氏がサンダース氏を20ポイントも引き離していたミシガン州で、サンダース氏が逆転首位を獲得する「番狂わせ」もあった。

ミニ・スーパーチューズデー（3月15日）ではクリントン氏がフロリダ、ノースカロライナ、オハイオ、イリノイ、ミズーリの各州でサンダース氏に全勝し、ようやく大きくリードできた感がある。

クリントン氏はここまでで民主党の大統領候補指名獲得に必要な2383人の代議員のうち「スーパー代議員」を含む1561人を獲得し、堅実に歩みを進めているといえよう。ミニ・スーパーチューズデーでクリントンに引き離された感のあるサンダース氏だが、それでも代議員800人を獲得しており、当初の予想以上に善戦している。

## 分析と展望

3月16日現在、ミニ・スーパーチューズデーの結果を受けてクリントン氏が民主党の候補指名獲得に向け、大きく一歩を踏み出した状況である。対するサンダース氏は守勢に回ってはいるものの、今後も選挙戦を継続すると見られ

ている。

現下の趨勢が続けば、クリントン氏が民主党の大統領候補に指名される可能性が高い。彼女の最優先課題は、中道派と旧左派の対立が続く民主党内の亀裂を修復し、サンダース支持に流れた「ミレニアル世代」の青年層を取り込むことである。だが、クリントン氏は当初は支持していたTPP（環太平洋パートナーシップ協定）に反対を表明したことで民主党穏健派から批判されている。本選を視野に入れ、これ以上左傾化すれば民主党穏健派の離反を招きかねない。かといって、党内の支持を固めきれなければ、共和党候補相手に本選で苦戦が予想される。

民主党内部の亀裂を修復しつつ、同時にどのようにして本選挙で共和党相手に優位を固めていくか——この点がクリントン氏にとって、戦略上のジレンマになるだろう。

他方、共和党側の見通しはなお不透明であり、いくつかのシナリオが想定可能である。

現状の趨勢が続けば、トランプ氏が共和党の大統領候補になる公算が高まるだろう。だが、トランプ氏が候補者指名を獲得した場合、11月の本選挙でトランプ氏に投票しないと言する共和党員が続出している。加えて、共和党の一部には、11月の本選挙で第三政党の候補者を立てようとする動きもある。トランプ氏が候補者指名を獲得した場合、共和党は事実上分裂し、大量の「造反者」に悩まされる可

能性すらある。当然、そうなれば民主党を利することになるろう。

また、現在までのところトランプ氏は優位に立ってはいらぬものの、ミニ・スーパーチューズデーを経てなお、共和党の候補者指名獲得に必要な1237人の代議員中、621人を獲得したに過ぎない。

トランプは共和党員のみならず、無党派層や民主党員からの支持が追い風になっているといわれる。だが、今後の予備選挙では共和党に党員登録している者しか投票できないクロード・プライマリーの州が増えていく。

ここまでのところオープン・プライマリーの州では12州中10州で勝利を収めているトランプ氏だが、クロード・プライマリーでの勝利は4州中2州のみで旗色が悪い。クロード・プライマリーの州が増える今後の予備選挙はトランプ氏に不利との予想もある。

仮にクロード・プライマリーの州でトランプ氏が苦戦し、このまま予備選挙での混戦が続いた場合、どの候補者も過半数を獲得できず、共和党全国党大会（7月18～21日）に決着が持ち越される可能性もある。そうなった場合、誰が共和党の大統領候補に指名されるかは全く不透明になってしまふといわざるを得ない。

上記いずれのシナリオが実現するにせよ、共和党の勢力基盤や党のイデオロギー的性格に大きな影響が及ぶことは

必至である。共和党は大きな岐路に立たされており、誰が共和党の候補者に選ばれるにせよ、共和党は再編の動きに向かつて加速していくのではないだろうか。